

Title	唐修『晋書』に見える「天壤無窮」について
Author(s)	井上, 了
Citation	懐徳堂研究. 2018, 9, p. 51-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71313
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

唐修『晋書』に見える「天壤無窮」について

井上 了

はじめに

『日本書紀』神代紀のいわゆる天孫降臨の場面で引かれる「一書」に、天照大神が天津彦彦火瓊瓊杵尊へ与えた神勅として

因勅皇孫曰、葦原千五百秋之瑞穂国、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。宝祚之隆、当与天壤無窮者矣。^①

とある。これは『書紀』の本文ではなく「一書曰」として引かれる異文にすぎないが、「天壤無窮の神勅」として後世きわめて重視された。たとえば「大日本帝国憲法」の「告文」冒頭に

皇朕レ謹ミ畏ミ皇祖皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ宝祚ヲ承継シ旧凶ヲ保持シテ敢テ失墜スルコト無シ

と、また「教育勅語」に

一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

とある。重要な成語であるものの、「天壤無窮」の出典は意外に知られていない。^②

たとえば重野成斎『教育勅語衍義』は「教育勅語」の出典を漢籍から丹念に拾っているが、「天壤無窮」については上記の『日本書紀』を掲げるのみで、これより古い漢籍の出典を指摘しない。重野の引検は経書のほか左

国史漢から『楚辞』『説苑』さらには韓愈「原道」にまで及ぶのだが、確かにこれらのいわゆる「古文」のうち「天壤無窮」の用例は見あたらない。しかし『書紀』成立時の状況を考えれば、重野が仏典や六朝文を顧みなかったことは不適切だろう。⁴⁾

家永三郎は、沈約「光宅寺刹下銘序」の「今事与須弥等同、理与天地無窮」や佚名「隋龍藏寺碑序」の「庶使皇隋宝祚与天地长久」など多くの用例を挙げ、また「我が飛鳥寧楽朝の仏教界にも宝祚長久の願文が多数見出される事実」を指摘して、「この神詔文の成形に当つては、当時の仏教界の類型的文章から大なる影響を受けたことが確認される」と述べた。⁵⁾

福井康順は、「天地と共に無窮である」ことを願う思想は「インド的ではない」として家永説を批判し、「理与天地無窮」や「庶使皇隋宝祚与天地长久」を『老子』の「天長地久」から出たものとして「これ等は、むしろ仏教のいわゆるシナ化を示している例証である」という。そして『史記』秦始皇本紀に「至于万世、伝之無窮。」とあり、また神武天皇が日本史上で始皇に相当する位置を占めると指摘して、天孫降臨の神勅は「始皇本紀にその構想の本来がある」と主張した。⁶⁾ しかし、「天壤無窮」句が成住壞空の思想に反することは、この句が「シナ化」

した仏教の「宝祚長久の願文」を踏まえたことを否定するものではあるまい。

本稿では、漢籍における「天壤無窮」について初步的な用例調査を試みる。

「与天壤同数」（管子）

「壤」の原義は「柔らく肥えた」土⁷⁾で、「天壤」は本来「天地」の雅称だろう。たとえば『管子』幼官篇に「天壤山川之故祀、必以時。」とあり、また『莊子』応帝王篇に壺子の語として「郷吾示之以天壤、名実不入、而機発於踵。」とある。空間的な広がりとしての「天地」とは別に「天壤」を用いた例としては、たとえば『墨子』辞過篇に「凡回於天地之間、包於四海之内、天壤之情、陰陽之和、莫不有也。雖至聖不能更也。」とあるが、これは時間を示す語ではないようだ。⁸⁾

時間的な永続をあらわす語として「天壤」を用いた例としては、『管子』山至数に「聖人理之以徐疾、守之以決塞、奪之以輕重、行之以仁義、故与天壤同数。此王者之大轡也。」とある。正しい政策を行えば「天壤と数を同じくする」という主張で、「天壤」を天地の広大さではなく時間的な永続の意で用いる例、しかも「聖人」「王

者」の治世を頌ぐ表現として用いるものとしては、このあたりが古い用例だと言えるだろう。¹⁰⁾

「与天壤相敵」（魯連子）

さて、『戦国策』齊策などによれば、田斉の湣王の時、燕の楽毅らが斉を攻めて七十余城を取った。湣王は非業の死を遂げたが子の襄王が立ち、数年後には斉の田単らが燕軍を破って故地を回復した。このとき斉の聊城に進駐していた燕将が、退却して処罰されることを恐れて籠城し、斉軍はこれを攻めたが戦況は膠着した。そこで斉の魯連が「無益な抵抗をやめ、軍を全うして燕王へ復命すれば、終身の名を成し、累世の功を立て、業は三王を流を争い、名は天壤と相い敵ることとなるでしょう。」と書き送ったところ、燕将は喜んで聊城から退去したという。

この一文は要するに当面の敵に対する退去勧告で、撤退することが燕王の意にかなない燕の士民のためにもなるという説得である。「忿恚の心を去れば終身の名を成し、忿忿の恥を除けば累世の功を立つ」まではともかく、「業は三王と流を争い、名は天壤と相い敵る」とは、一将軍への辞としていかにも大袈裟だろう。しかしすくなくと

もこの状況においては、侵略軍に対して撤退を説く「正しい」勧告だと言える。

魯連の「業与三王争流」「名与天壤相敵」は古典の名句として長く踏襲された。たとえば馮衍「顯志賦」に「昔三后之純粹兮、每季世而窮禍。弔夏桀於南巢兮、哭殷紂於牧野。詔伊尹於亳郊兮、享呂望於鄴洲。功与日月齐光兮、名与三王争流。」（『後漢書』馮衍伝下）とある。これが「三后」について「名与三王争流」という文章になっていることは、この句が対象を問わず用いられる定型文となっていたことを却って傍証する。また『三国志』崔林伝注「以成万世之功、齐天地之無窮、等日月之久照、豈不有踰於羣聖哉」や晋孫楚和氏外孫道生哀文「誰能長久、与天無窮」（『芸文類聚』三十四）、『魏書』常景伝「託身与金石俱堅、立名与天壤相弊」など、魯連書を踏まえた用例は枚挙に遑ない。

「与天壤無窮」（桓玄）

大きく降って、唐修『晋書』の劉牢之伝には次のような記事がある。

東晋の末期、朝廷の重臣であった司馬元顕が軍閥

の桓玄を征討しようとし、劉牢之へ出陣を命じた。劉牢之は司馬元頤を信用しなかったが、やむをえず涑洲に進出した。桓玄は何穆を派遣して劉牢之を説得させた。

「乱世の君臣で互いに信じあつた者は、燕昭王と楽毅、劉備と孔明といった例がありますが、いづれも功が成る前に主君が早世したものです。もし功が成つておれば臣下は禍に遭つていたでしょう。俗に『狡兎が尽きて獵犬が煮られる』と言います。名将であつた秦の白起や漢の韓信も肅正されました。今あなたは、我々と戦つて負ければ責任を取らされ、勝つても肅正されます。しかし、ひとたび心を決めれば、身は金石のように安泰となり、名は天壤とともに無窮となるでしょう。生命も名誉も失つて天下の笑いものとなるのと、どちらが良いでしょうか。よく考えてください。」

劉牢之はこれを納れ、部下である劉裕らの諫めを聞かず、桓玄に味方した。

都に入った桓玄は、司馬元頤らを処刑し、劉牢之を退け、東晋を篡奪して楚帝を称したが、わずか三月で劉裕らのクーデターに遭つて敗滅した。

桓玄（の命を受けた何穆）は劉牢之へ投降の利を説いたが、その論法・表現は明らかに魯連を踏まえている。¹³ただし魯連が「業与三王争流、名与天壤相敵」と言うところを「身与金石等固、名与天壤無窮」と改めており、これがおそらく「与天壤無窮」五字の初出である。¹⁴

ところで、『晋書』は該当箇所を「則身与金石等固、名与天壤無窮」とするが、『芸文類聚』二十五（人事部九「説」）に引く「晋桓玄与劉牢之書」は「則身与金石等固、名与天壤俱窮」に作り、『太平御覽』四百六十二（人事部一百三「游説下」）に引く『晋中興書』も「則与金石等固、名与天壤俱窮哉」に作る。「無」俱の字形は類似するが、「無窮」を「俱窮」とする誤りがそれぞれ独立して生じたとは考えがたい。「天壤俱窮」ならば直後の「身名俱滅」と対応し、また張協「詠史詩」に「名与天壤俱」の句がある。おそらく本来「俱窮」であつたのを「無窮」に改めたものと思われ、『晋書』の「与天壤無窮」は劉宋以降の誤伝あるいは修文に出るものとなる。¹⁵

しかし何穆の説得は、魯連のそれとは異なり、一応は官軍である劉牢之に対して、逆賊である桓玄が裏切りを勧めたものである。「天壤無窮」とは東晋王朝への忠節を表す表現ではなく、ましてや王朝の永続を願う語でも

ない。反逆により得られる一身上の利益を指す語であった。「天壤無窮の宝祚」や「天壤無窮の皇運」といった表現との違和感は拭いがたく、このような縁起の悪い僻典を『書紀』（の一書）が採用したとは思われない¹⁸⁾。

「与天地無窮」

さて、「天壤無窮」の「無窮」が「俱窮」の誤写だとしても、これらとは別に「天地無窮」という句が用いられていることは確認しておく必要がある¹⁹⁾。

注目すべき用例としては、『晋書』段灼伝に載せる上表の「本枝百世、長保榮祚、名位与天地無窮」がある。これは西晋武帝を頌ぐもので、「天壤」ではなく「天地無窮」ではあるものの、王朝の永続を命じる神勅の典故としては桓玄書よりも余程ふさわしい。

また家永が指摘した「今事与須弥等同、理与天地無窮」（「光宅寺刹下銘序」）や「庶使皇隋宝祚、与天長而地久」（「龍藏寺碑銘」）、「与天壤而無窮、懸貞明而可久」（「昭仁寺碑銘序」）といった用例は、やはり王朝の永続を願うものである²⁰⁾。「庶使皇隋宝祚、与天長而地久」や「与天壤而無窮」といった句を参照して「宝祚之隆、当与天壤無窮者矣」句を組み立てることは容易だろう。

『晋書』の「天壤無窮」は「天壤俱窮」を誤ったものの、『書紀』（一書）の「天壤無窮」は「天長而地久」や「理与天地無窮」といった願文から組み立てたものであれば、両者の一致は単なる暗合で、前者が後者の出典だとは言えない。

もちろん『書紀』（一書）の編者は『史記』魯仲連鄒陽列伝の「是以業与三王争流、而名与天壤相弊也」や秦始皇本紀の「二世三世、至于万世、伝之無窮」、孝文本紀「祖宗之功德著於竹帛、施于万世、永永無窮、朕甚嘉之」等の文章を知っていただろう。だが『史記』あるいは『戦国策』が神勅の出典だと言うこともできない。魯連書を踏まえた作文には長い歴史があり、天壤無窮の神勅はその歴史の途中に位置する。

もし『書紀』（一書）の編者が魯連の語を直接利用するならば、天壤云々とは「名」について言うべきで、王業については「与三王争流」と言うべきだろう。しかし天照大神がその神勅で「三王」に言及するのはいかにも具合が悪い。本来は「名」について言うべき「与天壤無窮」を「宝祚之隆」に係る表現に転用していることは、もちろん『書紀』（一書）編者の漢文運用能力の高さを示すものでもあるが、先行する「庶使皇隋宝祚、与天長而地久」等の願文を踏まえたものと考えて不自然ではない。

四字熟語としての「天壤無窮」

「天壤無窮」の原文は「与天壤無窮」である。「天壤無窮」四字を文字どおりに読めば「天地そのものが無窮だ」という意味になり、「天地とともに無窮であれかし」と読むことはできない^②。ましてや無窮であるべきものが「宝祚」であることは「天壤無窮」四字のみからは決して読み取れない。本来これは（魯連においても段灼においても桓玄においても）「名」について言う表現だった。

「与」字のない「天壤無窮」四字だけで「宝祚が天地とともに無窮であれ」と読解できるのは、『書紀』の「宝祚之隆、当与天壤無窮者矣」を前提するからである。この意味で「天壤無窮」という「四字熟語」の「出典」は魯連でも桓玄でもなく『書紀』（の一書）だとと言える。

『書紀』より古い用例を索めなかった重野はおそらく正しかったのだろう。

まとめ

「与天壤無窮」句の用例は、筆者が確認できた限りでは、桓玄が劉牢之へ謀反を勧めた書（『晋書』所引）が最古

である。これを「天壤無窮」の初出とせざるを得ないが、神勅の典故として相応しい用例ではなく、『書紀』（の一書）がこれを直接参照したとも思われぬ。また桓玄書は本来「天壤俱窮」だったらしく、これを「天壤無窮」とするのは『晋書』による誤引かと疑われる。

これらの句は、遠く『戦国策』の「業与三王争流、名与天壤相敵」およびこれを踏まえた『史記』に淵源する。しかし『書紀』の「与天壤無窮」は『史記』や『戦国策』を直接参照したものとは思われず、「シナ化した仏教の願文」である「今事与須弥等同、理与天地無窮」・「庶使皇隋宝祚、与天長而地久」・「与天壤而無窮、懸貞明而可久」などを参照した作文だと思われる。この点について家永説を支持したい。

『晋書』の「名与天壤無窮」と『書紀』（一書）の「宝祚之隆、当与天壤無窮者矣」とが完全に一致するのは、単なる偶然の結果だろう。

注

(1) 『古語拾遺』にも「天照大神・高皇産靈尊、乃相語曰、」として類文が見える。

(2) たとえば一条兼良『日本書紀纂疏』は「天壤、謂天地。無窮者、期之久遠也。」というのみ。河村秀根『書紀集解』は張

協「詠史詩」を引いて「文選詠史曰、名与天壤俱。善曰、史記魯仲連与燕將書曰、業与三王争流、名与天壤俱弊。……尚書微子之命曰、与国咸休永世無窮。」という。

(3) 重野安繹「教育勅語衍義」（明治二十五年、小林喜右衛門。明治四十五年）に朝鮮総督府から「略本」が印行されている。重野は帝国大学文科大学の教授を務めており、門下生に西村時彦がいる。

(4) 重野が引く史書は『史記』『漢書』までで、『東觀漢記』『三国志』以降には及ばない。筆者の見るところ「教育勅語」は范曄「後漢書」班彪列伝を多く踏まえており、また後述するように「天壤無窮」の初出は唐修『晋書』に降る。重野が魏晋以降の史書を検していないことは遺憾。

(5) 家永「所謂天壤無窮の神勅文の成立について」（『人文』二二一）、人文科学委員会、一九四八年）。また「神代紀の文章に及したる仏教の影響に関する考証」（『日本思想史の諸問題』斎藤書店、一九四八年）に詳説。後に『家永三郎集』（第二巻、岩波書店、一九九七年）に収録。

(6) 福井「天孫降臨の神勅について」（『宗教研究』一三三、一九五二年）。

(7) たとえば『説文解字』に「壤、柔土也。」（徐鉉本）・「壤、軟土也。」（『太平御覧』十引「説文曰」と、「釈名」釈地に「壤、壤也。肥濡意也。」と、『尚書』禹貢「厥土惟白壤」の偽孔伝

に「無塊曰壤。水去土、復其性、色白而壤。」とある。

(8) 『列子』黄帝篇や『淮南子』精神訓にも類話が見える。

(9) 「天壤」ではなく「天地」が時間的に「無窮」であることは、『楚辭』遠遊の「惟天地之無窮兮、哀人生之長勤」や魏明帝「月重輪行」の「天地無窮、人命有終」等に見える。

(10) 同じく『管子』の軽重乙篇に「夫海出沸無止、山生金木無息、草木以時生、器以時靡弊。沸水之塩以日消、終則有始、与天壤争。是謂立壤列也。」とある。

(11) 『戦国策』の該当部部は次のとおり。

燕攻斉、取七十余城、唯莒・即墨未下。斉田单以即墨破燕、殺騎劫。初、燕將攻下聊城、人或讒之。燕將懼誅、遂保守聊城、不敢帰。田单攻之歳余、士卒多死、而聊城不下。魯連乃〔為〕書、約之矢、以射城中、遺燕將曰、「吾聞之、智者不倍時而棄利、勇士不怯死而滅名、忠臣不先身而後君。今公行一朝之忿、不顧燕王之無臣、非忠也。殺身亡聊城、而威不信於斉、非勇也。功廢名滅、後世無称、非知也。……今燕王方寒心独立、大臣不足恃、国敵既多、民心無所帰。今公又以聊城之民、距全斉之兵、期年不解。是墨翟之守也。食人炊骨、士無反北之心、是孫臏・呉起之兵也。能已見於天下矣。故為公計、不如罷兵休士、全車甲帰、報燕王。……故去忿恚之心、而成終身之名。除忿忿之耻、而立累世之功。故業与三王争流、名

与天壤相敵也。公其凶之。」燕將曰、「敬聞命矣。」因罷(到)讀(倒轉)至讀(去)而(去)。故解齊国之困、救百姓之死、仲連之説也。〔四部叢刊〕景元至正刊鮑彪校注吳師道重校本)

なお、同じ事件を述べた『史記』魯仲連鄒陽列伝は「是以業与三王争流、而名与天壤相弊也。」に作り、この燕將は自殺して田単は聊城を屠つたとする。

(12) 『晋書』劉牢之伝の原文は以下のとおり。

自古乱世君臣相信者、有燕昭樂毅・玄德孔明、然皆勲業未卒二主早世。設使功成事遂、未保二臣之禍也。鄙語有之、「高鳥尽、良弓藏。狡兔殫、獵犬烹。」故文種誅於句踐、韓白戮於秦漢。彼皆英雄霸王之主、猶不敢信其功臣。況凶愚凡庸之流乎。自開關以來、戴震主之威、挟不賞之功、以見容於闇世者而誰。至如管仲相齊、雍齒侯漢、則往往有之。況君見与無射鉤屢逼之仇邪。今君戰敗則傾宗、戰勝亦覆族、欲以安婦乎。孰若翻然改図、保其富貴、則身与金石等固、名与天壤無窮。孰与頭足異処、身名俱滅、為天下笑哉。惟君図之。

(13) 彼ら武人がこのような文を自ら作り、あるいは読んで理解できたとは思われない。幕僚による代作あるいは後人による擬作を疑うべきだが、『晋中興書』がこれを載せていることから、遅くとも劉宋代にはこの文が「桓玄が劉牢之へ遣つた書」と

して成立していたことを知る。

(14) 唐修『晋書』の成立は『書紀』の成立より七十年ほど早い。「一書」の成立は当然『書紀』本文より早いだろうが、『晋書』よりも早いとみる積極的な理由はない。

(15) 『芸文類聚』や『太平御覧』の藍本となった六朝類書(『修文殿御覧』や『華林遍略』等)が桓玄書を載せていた可能性もあるが、そもそも「一書」が桓玄書に基いている可能性が低だろう。

(16) あるいは「俱窮」「俱滅」という同字の使用を病として後人が意図的に「天壤無窮」へ改めたものか。

(17) 『晋書』の信憑性について、たとえば『旧唐書』は「然史官多是文詠之士、好採詭謬碎事、以広異聞。又所評論、競為綺艷、不求篤実、由是頗為学者所譏。」(房玄齡伝)という。

(18) 『書紀』による中国史書の参照・利用について、たとえば神功紀の自注は『晋起居注』を引いており、また孝徳紀で僧旻法師が「晋武帝咸寧元年、見松滋。」と述べるのは何れかの晋史を踏まえた発言に見える。しかし成立が遅く大部でもあった『晋書』が成立後すみやかに倭国へ輸出された可能性は低いだろう。

(19) 「無窮」は一般的な語で特定の典故を指摘しがたいが、これを帝位の世襲について用いた例としては、福井が指摘するのとおり『史記』始皇本紀の「朕為始皇帝、後世以計數、二世三

「世至于万世、伝之無窮。」が最古だろう。統一前の秦においても蔡沢が「天下継其統、守其業、伝之無窮、」と述べているが〔史記〕范雎蔡沢列伝・『戦国策』秦策）、これは謀議の場での発言で、後世の潤色・作文の可能性がある。

漢代以降、帝位の継承について「伝之無窮」を用いることは「蓋受命之王務在創業垂統伝之無窮」〔漢書〕匡張孔馬伝）・「高皇帝為漢太祖、孝文皇帝為太宗、世世承祀、伝之無窮、朕甚樂之」〔韋賢伝〕のように一般化した。また「無窮之祚」についても「武宣皇后・文德皇后、各配無窮之祚」〔三國志〕文昭甄皇后伝）・「今朕奉承大運、愛育黎元、何当聿遵皇祖之跡、永保無窮之祚」〔書紀〕崇神四年冬十月壬午詔）など多くの用例がある。

「万世一系」についても出拠を明らかとしたいが、『国史略』に「皇統一系、万世不革」〔円融天皇〕とある。

(20) もちろんこのような用法は仏教分野に限られたものではなく、たとえば『旧唐書』音楽志三に「鼎祚齊天壤」とある。

(21) たとえば『抱朴子』論仙「謂始必終、而天地無窮焉。謂生死、而龜鶴長存焉」は「天地そのものが無窮である」という指摘であり、「(何が)天地のように無窮であれ」という意味ではない。